

SHOW HEY シネマールム

インビクタス / 負けざる者たち

2009年・アメリカ映画
配給 / ワーナー・ブラザーズ映画
134分

2010(平成22)年2月14日鑑賞

TOHOシネマズ梅田

Data

監督・製作: クリント・イーストウッド

出演: モーガン・フリーマン / マット・デイモン / トニー・キグロ
ロギ / スコット・イーストウッド / ラングレー・カークウッド / ボニー・ヘナ / マクニール・ヘンドリックス

みどころ

弱小だったラグビーチームを、ワールドカップで優勝させたい! 長い監獄生活から大統領に「転身」した南アフリカのマンデラ大統領が、そんな熱い思いを全国民に掲げたのは一体なぜ?

民主党のマニフェストが色あせつつある今、「融和」と「友愛」を対比させ、またリーダーシップのあり方を対比させながら、1995年の「あの試合」を見守りたい。もっとも、映画としては英雄讃美色が強く、意外に単純・・・?

■ ■ 優勝への思いの強さは? ■ ■

本作は、日本では阪神・淡路大震災が発生した1995年の6月24日に行われたラグビーのワールドカップ決勝戦をハイライトとして、ネルソン・マンデラ大統領が起こした奇跡を感動的に描く映画。1994年に南アフリカ共和国大統領に就任したマンデラ大統領は、「黒人と白人の融和」を最大のテーマとして掲げるとともに、弱小チームだった南アのラグビーチーム、スプリングボクスを1年後のワールドカップで優勝させるという夢を掲げたが、それはなぜ? 去る2月13日にカナダのバンクーバーで始まった冬季オリンピックで、女子モーグルの上村愛子は惜しくもメダルを逃し4位に甘んじたが、さてこれから日の丸飛行隊は? 織田信成、高橋大輔ら、そして浅田真央、安藤美姫らフィギュアの精鋭部隊は? 彼ら彼女らに今、日本国と日本人は熱い視線を注いでいるが、それはマンデラ大統領がスプリングボクスを優勝させたいと願った気持と比べれば屁みたいなもの?

■□■ホントは難しい！政治とスポーツの距離感は？■□■

スポーツを政治に最大限に利用したのはヒトラーで、1933年にナチスドイツが政権を握ったのち、1936年にベルリンで開催された第11回オリンピックでは、開催国たるドイツは、金33個、銀26個、銅30個、計89個のメダルを獲得したというからすごい。ちなみに、女子モーグルの優勝候補だったカナダのジェニファー・ハイルはアメリカのハナ・カーニーに敗れて銀メダルになったが、カナダだけがこれまで開催国で金メダルをとっていない国らしい。もっとも、2月15日夜には、カナダのA・ピロドーがはじめて金メダルを獲得したとのニュースを聞いたから、カナダの国民は大喜び。

それはともかく、政治とスポーツの距離感はきわめて難しいから、本作のように大統領主導で南アのラグビーチームをワールドカップで優勝させるべく全力を注ぐことの是非論はあるはずだが、本作はあくまでストレート。なるほどクリント・イーストウッド監督が描けば、かつての話題作レニ・リーフェンシュタール監督の『民族の祭典 オリンピア第1部』（38年）の是非が議論されるようなことも起こらず、ただストレートな感動作となるから不思議・・・。

■□■マンデラの「理想」VS鳩山総理の「友愛」■□■

大きな期待感をもって迎えられた昨年8月31日の政権交代だったが、約半年を経た今「政治とカネ」問題の他、子ども手当や高速道路無料化を中心とするマニフェストの行き詰まり、普天間基地移設問題をはじめとする日米外交の問題点が露見し、かなりヤバイ状況となっている。本作にみるマンデラ大統領は公私ともに理想的で非の打ち所のない人物として描かれているから、鳩山由紀夫総理をこれと比較するのはかわいそうだが、白人と黒人の融合という理想を掲げ、その実現に邁進するマンデラ大統領の姿をみていると、「友愛」を掲げながらそれを具現化するエネルギーやリーダーシップに乏しい鳩山由紀夫総理の情けなさを実感せざるをえない。

映画冒頭に登場する、旧政権下のスタッフに対する「私は君たちを必要としている」とのマンデラ演説は、政権交代直後の鳩山由紀夫総理が何よりも参考にすべきだったはず。また、これ見よがしに白人への報復的措置を決めようとする国家スポーツ評議会の黒人リーダーに対して「融和」を説くマンデラ大統領の姿は、圧倒的権力をもった小沢一郎幹事長が今こそ参考にすべきものだ。本作はラグビーのワールドカップ優勝という1点のみに絞ったマンデラ大統領の「理想」実現の姿を描いたものだから、どうしても単純な英雄讃美色が濃くなり、クリント・イーストウッドの作品としては深みに欠けるが、本作鑑賞後はもっと広くマンデラが掲げた「理想」と、あくまでそれを追求する姿勢をしっかりと考えたい。

■□■こちらのリーダーシップは？■□■

黒人の名優モーガン・フリーマンが実在の人物マンデラ大統領を演じるのなら、俺だって・・・。そう考えたかどうかは知らないが、近時『ボーン』シリーズで過激なアクションをこなし続けているマット・デイモンが、本作では実在の人物スプリングボクスの主将ピナール役を演じている。さて、そんな彼の演技とリーダーシップのポイントは？ずっと負け犬根性がしみ込んだチームを建て直すポイントは、マンデラ大統領の優勝への熱い思いをピナールがいかに自分のものにすることができるかということだ。

その第1のきっかけは、マンデラ大統領から「お茶」に招かれ、一対一で対話したことだが、さてこれによるピナールのマンデラ大統領への評価は？第2は、チーム全員を率いてマンデラ大統領が18年間も閉じ込められていた監獄島ロベン島を訪れ、その独房を見学したこと。一度これを見学しただけでマンデラ大統領の18年間の思いをピナールが感じとったという構成は出来すぎの感が強いが、そんな体験がピナールの勝利への強い原動力となったことは明かだ。本作の感動スポーツ映画としてのハイライトは、ラスト30分でみせる南アのスプリングボクスVSニュージーランドのオールブラックスの決勝戦での熱闘だが、そこでピナールはチームリーダーとしていかなる役割を？

2月14日に閉幕した東アジアサッカー選手権2010で、日本代表チームたる岡田JAPANは香港、韓国に相次いで敗れるなど、成績がふるわないのはなぜなのかを考えながら、本作におけるピナールのリーダーシップのあり方をしっかり検討したい。

2010（平成22）年2月17日記

岡田ジャパン、Wカップ危うし！

ワールドカップ南アフリカ大会が6月11日に開幕する。日本代表は5日スイスでの事前合宿を打ち上げたが、合宿中の強化試合では、イングランドなどに2戦連敗。サッカーの技術的なことはわからないが、敗因は日本人選手から強烈な個性が失われたこととハングリー精神の欠如。ゴルフの石川遼や宮里藍のように世界と肩を並べる選手も育てているが、それは例外。女子テニス界で見事な復活を遂げた伊達公子には拍手を送りたいが、これは反面若手選手のだら

しなさを物語るもの。サッカーは団体戦だから選手個々の能力と共に、作戦や選手起用の妙が見モノ。そこで岡田武史監督采配に注目だが、5月24日の韓国戦敗退後、進退伺いをした彼には不安がいっぱいだ。同じ岡田でも弱小球団（？）オリックスを率いてセパ交流戦のトップに立とうとしている岡田彰布監督の指導力とは月とスッポン。今度のWカップも、期待を集めるだけ集めてあと一歩で残念、という結果になるのでは？

2010（平成22）年6月7日記